世說兒談

三

ロ 9
3558
3

京都帝國大學圖書

門 15
號 472
巻
口 9
3558
3

見談卷之五

世說賢後

樂羊子趙學し高。外ふること七年ありて家
ゞ妻ゞ家に帰りて法をそなく。母ゞ妻ゞ
羊子母と饋をありがつく他舎乃雞あて
園中に入る。姑ゝを盜ゝ殺しく舎ふ妻雞
を對して食ゝで法く餐つで。姑おやまんてゝの
ゆへを問ゞたるゝいさ生ゝ居まつたう

小幡文庫

し高金ハ代乃肉あり姑是を感じたりて
うの肉と棄たり
樂羊子行くみちあり高おちる金一餅を得
て帰り妻に与へ妻乃曰く妾ハ聞く車有
志士ハ盗泉の水ハ飲まず廉者ハ嘗来の食
をうけずとやうやうおもうるハ行ひを汚さんや
乃ち行ひを汚さんや羊子大いに慚じて金ハ野
に捐きう

漢嬰ハ東陽乃人なり少して德行ありて郷
黨ハ信あり王莽秦末ハ王侯ハ
乱るるを見て東陽の人張嬰を奉じて主とす
ハ欲ると母の曰不可なり我を捨てうしなる貴
賤ありて一旦富貴なるハ不祥なり今ハ兵を
ひく人乃ち己ハ幼なり事なるハ
ものを利を受んハ禍いの
きたるところなんと云えり遂て女英雄と

いふべ
漢乃成帝趙飛燕を幸し給ふ。飛燕何様
えうわして姙婦帝様呪詛をなし誘しうり
ちふをいあんぐ同人で婕妤乃曰く妾ゆく
死生命あり冥貴天ひのまう我いをわさ
わくもなさいまいをかうむることれしまして
邪をなし何乃重むるあらんや鬼神
ちることあらば邪倚の訴をまることあるべ。

ちし尼祇ちるこちれくいうんうるこもの何の言
うあらんと以て。姙婦妊娠ふ元ちまれ
て天中にあり高くち帝れ幸を得し女なり
飛燕妾後ふ宮ゆ入まこ高くく幸ゆ給し
ゆり故ふなといえど毋ちじめれ嫉あるふを
妬くく讒し我は二人ゆ幸ゆさだめんと欲する
女乃事情形り
曹公蔡文姫ふ同じ事ないひをゆくまん人の京

い墳籍れ所汝ことよく憶識しまるや
いるや文姫が曰くせうし亡父わきに書四千餘
を賜ふこと有。ことに彼ども今うの書うをまなぶ
すること有今誦憶をるところまうふ四百
餘篇あり曹公乃喜く十歳所命して美
人出通信しまるに写しむべしや文姫が曰く
妾聞く男女乃別の禮いこと親授をとこと有り
妾小者紙を以真艸をもて命のまに従ん

いえり敢て命しられば繕写し妾をして
まく法つりきり文のこと誤まること有
趙母女を嫁さしむるとき女ゆくふのぞんでいま
し教て曰く情ことなかれ。女曰
曰くよれちをせざんを恵き事なるさんや母の
いくなることを尚きれ人ちを移さずまる
ふを況の実ことにをば人これをみくむ古や
それをしかんといつり

許元が婦人阮衛尉が女。德如が嫁なり是奇
麗なり。交接しをりうく。許元まこと入て理をもて
これし。家人ふうくこれ憂かしうおもひ
許元が客きうあり婦婢を命じ。此やうを
うんきせ婢かえりうく曰くこゝ独宅は植郎なり
といふ。婦乃いうく憂ふこゝろ植郎忘許元ふ
こゝろ入く我を理をよせもく免んなり植をこし
く許ふ語りしい阮家をそれ砺女を嫁をもめて。

鄉ふあふこと古き意あるべし。なんぢ古きをよく
察し多理をべし。許すれいち内ふ入婦をんく
まこと出んとき婦の思ふい許元今あぐまこと入く理
すふこと内ふ泊ぐと料こく則元が裾を捉く停
めけまぐ。許元が曰く婦に四德なりといふ鄉ぞ
幾ぐあるや。婦乃いくいく此を君きこゝろかるぐ容
乃こ泊こと士可百行なりこと云。君いう稽ぐくく
内ふ。許が云くいく皆於れるのちこ婦が曰くそれ

百行の徳をいくはず兄弟を
好んで徳をおのまず。何で皆備るがいいんや。兄
弟ばかり色あり妻のちいてをを敬しをりんを思
婦見おくとて好きる事なけをいかくれでく婦れ行方
許元度郭郎がありて。其の里乃人を多く
官名
用い高下乃官可ばるひあり。魏の明帝
ある日をあやまを鬼賓ををし許元を牧ーせ
うの婦出く元を誠ろく曰く明主い理ばりって

奪ーー情ばかくおえがさしがいつう。元をでふ
いうあれを。帝覈問しをる元ちてく曰く帝
かってるんぢが志る所をあげよといえうばが郷
乃人を見ばが知るとろなり。陛下移ぐいい臣が
職ふ稱ふとかるつばふを検按しまへをし職
ふれををいばうの罪をうけんとふ帝これを按
按をれを。皆用るとてふの人官ふるつう。ちて可
といく元ゆるちをうをれど毎衣服ゆを物

じゐれば。話しあるあたる衣服を元ふ賜り
きりぱで免元收てくれしとき家こぞりて是を
かるるわざも婦ものみれどくふしあいわく。
憂ふることるれ。面ぐくあえり給んとく。粟乃
粥を煮りく待れど。去ぐくして元かえれ利
いくりあり
許元晋乃景王のかえふ孫をくれり元が
門人走るへく婦ふ去れども。婦まさふ機中

ふありて神色はれふかるこれくして回りを
くもくを去るれく門人まさ裏児をかくさんと
欲と云ければ。婦乃いく児までふるんで誅乃
をとぶことあるんやといひく後乃墓所ふ居る
景王ままさ鐘會とはるりてを看をしせ
くし児の才ふをよぐを收ふ母といひ
りり児これを母ふとふ母乃いく汝ふ佳才といえ
どもその才多きくれし。ぐ児の胸ふわるふ

さてこれに率く与ふ語るとも且ふ法てるし
會語やめざ。又児朝乃てこれ同ふてもく形
うぶづーかて去えしうる児此あーふ去ぐひけ
る舎うえうてあるかさちを景王り對ふ故イ
はあふ免ちり
王乞測諸葛誕が妻を娶く学ひてへまてぷもの
がうーはげえく安るかき婦ふいいく同く
新婦を神色卑下みててこれ公紡と紡ぐと

いつり婦乃いいく大きよ袁云ふ彷彿ることあ
いどんを婦人をしく蹤を英傑ふあらぐしんや
王經がし高貴若たりしが佐えく二千ろう
いられり。母ちをふかうく同く汝ひと寒家の子也
佐ぐく二千ろりいかふかいえぐ母ちの孫ふ出ふ
ぐろんや經ろ紡を用ひてあるぐ尚書とありて
疑とあるて晋ふ忠なーずてちくら紡ろ利
洋法しろ母に辞して同く母乃教ふ後ろぐ

今收つてきたり母[illegible]慽えるかたらるく治
曰くこれをりていたるりていたあり孝
方ありてるんぐ方ふ員うん邪といえり
賈充がまへの婦いたる李豊がむとめるり李
豊孫をられく婚を離して邊ふうりをるまた
ゆうされてかえるこ[illegible]充うの間ふ郭配ぐ
女を娶るり武帝ゆるして右乃夫人を充
ふたつ世李氏別まく外ふ侍こあへて充ぐ

令ふかつこと郭氏充ふ行うく李氏胥しめを
欲を充ぐ曰くうまいは剛ふ[illegible]て才氣あり郷
ゆうんるまたこと[illegible]ふい郭氏曰く威儀を
盛んみ多く侍婢をもきて李う方ふ
ゆる府李氏ふまたは迫ふまば郭氏わがつぐ脚
屈しけり曰く跪く再拜しるうえうあり
李ふ威乃をたち婦ぐき女なり
周浚安東ゆるうし府行くかうしるぐ累

あひ分り故有汝南乃李氏が家小紀
李氏富足といつゝも男子なくして女ありけ
が名を絡秀と云此女子に周浚といふ者を
人娶て云ふ所の一婢に男子を産ませ豬羊を
宰て数十人乃飲食をたりけり主の妻も
車に入て多く奔走て是をたらしめ
人なきごとし故小周浚嘉ふこれをうゝ亮
是ば独り此女子をかたちも容なくして

へるあり浚よりこれを妾にとおれども
父兄ゆるさず絡秀が同く李氏の門戸乃門
小貴きなくして世ぐ一族に勢ひ強しる乃
なんで一女をたゝまんやとゝわと貴族小連姻
きばとゝのちにおのるる者あらんとゝ小をい
く父兄絡秀が言小ちがひ浚小はゝり
ありゝはあ小伯仁兄弟をまゝけり絡秀伯仁
等にかゝりていく我身節を屈して汝が家

孝経小妾を称する古を李氏乃門戸を省く
んとのはるまでとの〻汝ホもし吾が家れ去さし
〻以親〻以なさどんだ門をもまさてを〻乃
ち〻以情身ぶいひきり給仏ホちぐく給
秀の命ホちぐひて是より世ホ孤てまさ
上を孝義を〻ふけく遇て〻以得う乃を
路秀父兄ういひし言ホて〻ホるち〻ホ
陶公ホしまを大志ホといつぐ母家酷まづしを

て母漢氏と同ぐく居る〻以同郡乃人有范
達ホて〻ちの母。この人ホより名ホ吉を孝
嘉ホうと世ホ人いひきり陶公侃ホとて孤ホ
いまうく宿を河ホ氷雪日ホ法て妻りうを
侃ホ室い縊磬ホどのちいさ〻をなりしホ達
ホ馬僕を〻れぐを多し是ホより侃ホ母漢氏
侃ホ語りて同く汝ホ外ホ出く客をぐホよ
吾ちうをを〻ホりホ秋漢ホ鬢地

みんなれくまさ打かえてふさたけ水なほおと
長しおもをきりて米数解ふうゆくさくく
諸屋乃はらを祈くおとぐく[redacted]ふまる
乞と薪とちすみとろくれ羅を制く沙多
馬草水しるみくさにもりてはめふ精食を
設ちうり花遠ゞ沒者皆食ふ足てれし故
遠りの才辯ちるみかくのごくしし精食設
ムるん歎しまさ深くく甚厚意ふ悅ぶ真ふ真

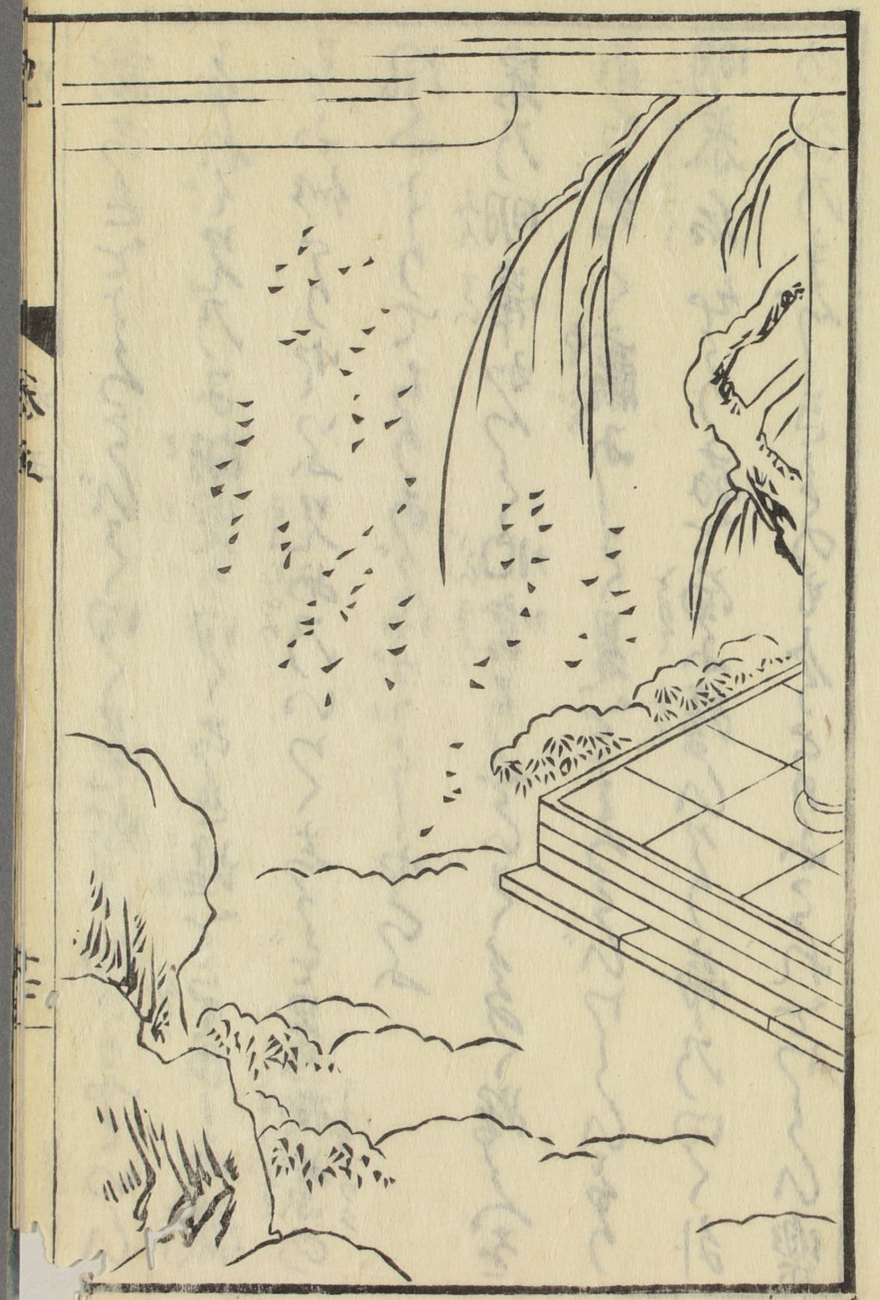
家をちりりりう侃おを進くゆまどそのわふ
宰百里許ふして百里とは古所一遠がいく君進来
ふく路ふ狹をしはさふかえるべしふ永をゞを
侃なりりつゞび数り遠が回く汝ちり給ひぐ
湯湯ふいりりてまたよ君ゞおとを奚錦をんと
いいりり故ふ侃かを寄り。遠洛陽に到りて
はめふ此宰ふ羊暉新顧榮甚ふ法人ふ称て
大可侃はは法を得ふり

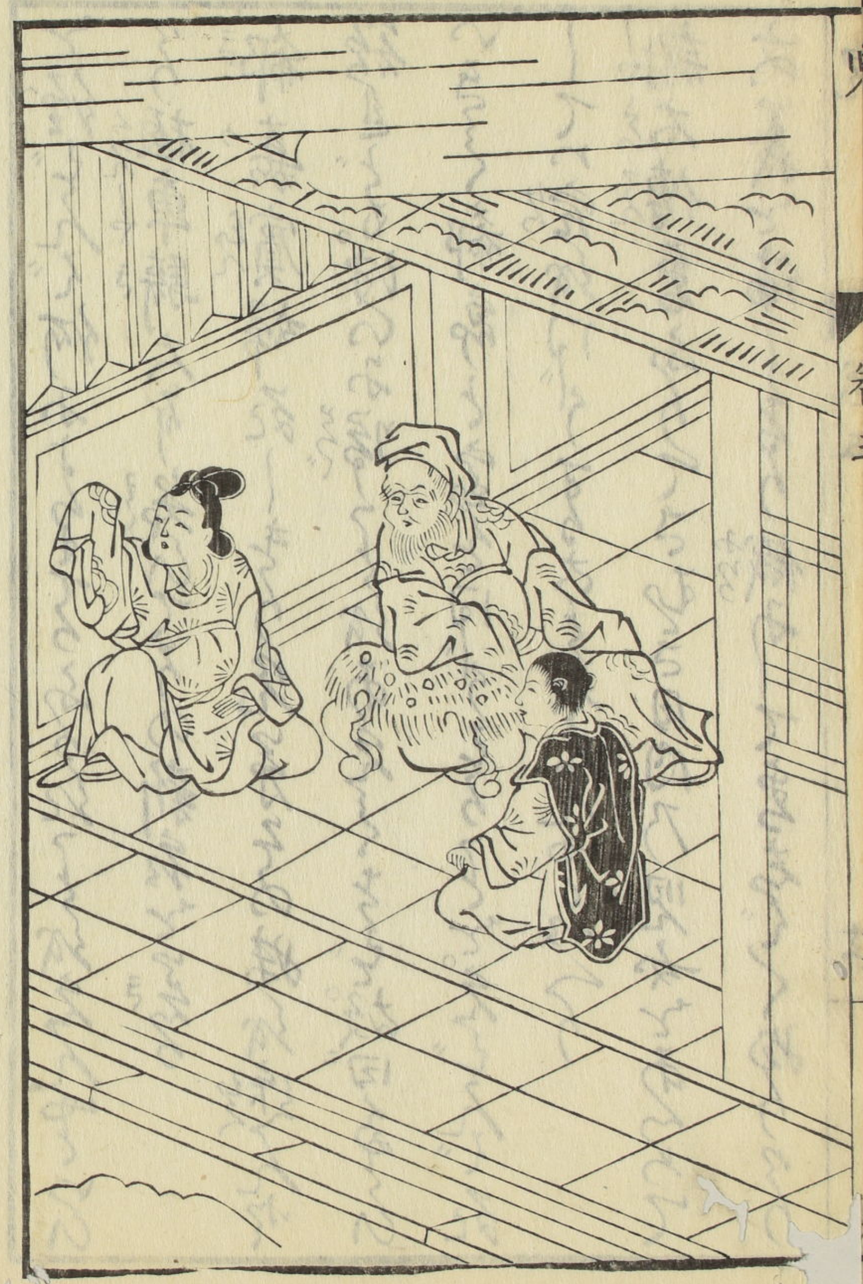
淘とわくるまで河漁梁乃妻となりて母の城
鱠を飾りあれど母鱠を封じ毒使ふかなり
まさに書物を反し侃を責て曰くなんぢ実に
く官物を吾に飾る此ものいまだ益なしとふあるべず
しくまさに吾り憂を海さしまといえるり秘
漢氏を賢めあり利
桓宣武蜀の李勢が妹に妾と為
す嘉を見を嘉しを李勢が妹に妾と為
す嘉を見を嘉しを李勢が妹に妾と為
す嘉を見を嘉しを李勢が妹に妾と為

をはじ見たのようを去るべてのちに其義する
るべかりく数十婢とるべふ白髮を抜くこれを
をそいこの母ちふ李が妹なる頭ふ梳て髪となる
く地り去るいつでも李が虜亀なる紙を刷べく
ふ鬼くかく鬼るかくといえる母密と勧うさず
て曰く実国やぶる家去ると来い応白髮を抜く今
かくもまるべく今りり吾去ろさ秘び是ふ悩る
まと云げるいまを去ることを慚く退きまり

韓康伯が母始めて机乃くづをくるるにより
て方けまづ市鞠れのあしきをえらび是をかえん
ゆ欲をとゝ云々。母答く曰我をもしかるをみるにん
で汝伯のよるをてる古袍をえんやといえり
槙車騎あらしき衣をきることなかれまづ浴
しるゆはふ婦新衣をかりくなるをれば車騎
大ふいりて持しさらしむまづ婦その新衣を
持しらしをく語ゆはるへいふい衣あらしき

と絵さとんで何ふよるをてるふるたることゆえんやといひ
ゆ槙車騎大ゆ怒ひてゆの新衣をとゝる
郗嘉賓婦死しきり兄弟その妹ゆ逆んゆ
欲をとも。はいふ婦ゆ答ゆあえくきをで故曰ゆ
いきく郗郎と家を同じうをるをとえをんで死
してい宮ゆ同じするをゆえんやといへり
謝太傅雪ふりてさむき日内乃児女をあつまて
文義を論しをり俄ふして雪をくぬりゆ





謝ふをとろこびくゐ曰く是何ふ仙さるをいひ
まれど兄乃子胡児ガ曰く古を塩をとを中ふ接
をふ仙さりかいふ兄め乃いく古ど是柳絮の
風ふよりてちりあゞ浮がごとしかるふ
宋乃明帝かく北宮りをいくるく婦人を
あつ兄く羸ふしく是をよろこびつしいをり
明恭后をり家を面ふ隆いろり帝乃曰く外
の家乃まゞきものも今ちりふこれをつしい樂

なり何のとく物りふ古を祝ざるや后の曰く樂
とをとこそれ多一豈姑婦妹をあつ兄く
婦人乃あらをあるちぶふして是をくものみ
かをんやふかを舎れよろこびをみりをこい是
乃曰ゞるぶかのひを多婦いろりをば帝怨
るく后何をこむ真后の兄景文人
乃かをして曰く后家に立しをい癈弱乃
婦人をりしが世変乃剛正なる何るかく

あるゝ世とはわるゝならべ
家乃古祖まさふのうゝ徳をふかゝ
京師ふ諠言しをゝは軍中古稜點撿城
ゝゝ天子と世んと欲ゝふ古祖家人ふ告
ゝ曰く外ゝのゝかゝ母びゝゝゝゝを
ゝん屋古祖が妻ふゝふ廚ゝゝけゝ是を
ゝくすれゝゝ奴杖をゝくゝ古祖をゝゝをいて
曰く大逆ふのゝゝゝ可ゝゝゝふ

みゝゝ脇ふさゝゝて古稜が妻ゝゝゝん
で家ゝゝゝゝ婦女恐怖ゝゝゝゝ
いゝゝゝゝ古祖驚ゝゝ出ゝ

怪談巻之五終